



東洋英和女学院

# 史料室だより No.101

2023.11.6 発行  
東洋英和女学院  
史料室委員会



大学チアリーダース部とかえで幼稚園の子どもたち

かえで幼稚園での大学保育子ども学科実習生受け入れ

大学構内で遊ぶかえで幼稚園の子どもたち

かえで幼稚園の子どもたちと村上哲朗教授

## ★ 大学での保育者養成と大学付属かえで幼稚園

東洋英和女学院大学に先んじて1950年に開学した東洋英和女学院短期大学保育科では、短期大学直属の理論の実践の場であり学生の実習の場でもある幼稚園を望んでいました。そうして1973年に誕生したのが「かえで幼稚園」です。現在の大学人間科学部保育子ども学科では、こうした歴史を踏まえ、毎年かえで幼稚園にキリスト教保育を学ぶ場として実習生を送り出しています。また、かえで幼稚園の子どもたちは折にふれ大学を訪れ、つながりの中にあります。

## ★ 目次

|               |  |          |    |
|---------------|--|----------|----|
| 特集1           | 大学付属かえで幼稚園創立50周年<br>かえでの庭の50年            | 大漣 知子 …… | 2  |
| 特集2           | 大学 アスレチック広場での保育研究実践 —村上哲朗教授インタビュー—       | ……………    | 6  |
|               | 140年史制作中！ 英和の歴史再発見 —その1—<br>卒業生初の教員 若林里雨 | 水谷 悟 ……  | 9  |
| 〈資料紹介〉43      | 卒業生 渡邊里枝遺稿集<br>『はなかたみ』が語る英和生の日常          | 水谷 悟 ……  | 10 |
| 〈東洋英和の先生がた〉11 | 津守 滋 先生<br>外交官の実績と歴史的洞察から論じられた国際関係論      | 池田 明史 …… | 12 |
|               | 利用統計／史料室の活動より（2023年4月～2023年9月）           | ……………    | 14 |
|               | 「史料室だより」既刊号目次（No.91～100）                 | ……………    | 16 |



## かえでの庭の50年

大学附属かえで幼稚園園長 大瀧 知子



創設当初の庭にて（1973年）



50年目の庭にて（2023年）

### はじめに

2023年度、大学附属かえで幼稚園は創立50周年を迎え、感謝の礼拝を重ねています。本園は、東洋英和女学院創立90周年記念事業の一環で短期大学附属幼稚園として1973年に設立されました。『東洋英和女学院120年史』には、「長野〔彌〕院長は、1958年まで短期大学保育科宣教師を務めたM.F. スクルトン教授の『もうひとつの幼稚園を』との願いを思い起こし、幼稚園設立を決断した」と、また『カナダ婦人宣教師物語』には、「〔ミス・ハミルトンからの〕『最後の命令』として長野先生が受け止めた新しい幼稚園設立」と、書かれています。また『東洋英和女学院 短期大学の歩み1950～1998』には、「保育科が長年抱き続けてきた附属幼稚園にかける夢の実現であり、一方では地域の要請に応えるものであった」と書かれています。

創設時、初代の園長（院長・短期大学学長）石井次郎先生は、次の事柄を附属園に期待されました。第一は、地域の子どもたちの幸せを願うものであること。第二は、東洋英和女学院に連なる枝としてキリスト教保育を行うこと。第三は、附属園として明日の保育に向けて研究と教師養成に寄与すること。

それから50年、本園は2,900人近くの子どもたちとその保護者、先生方、教育実習生、そしてたまプラーザ地域の方々とともに、歩ませていただきました。キリスト教を基盤とした生活の中で子どもにとっても大人にとっても、「自分らしさをもって生きる」ことと「他者とともに生きる」ことが大切とされる保育が、51年目の歩みを進めています。

現在のたまプラーザは賑やかでおしゃれな街となりました。しかし創設当時は「田園都市線沿線の開発途上にあり、赤土が舞う野原と細々とした街路樹、そして団地が先ず目にとびこんでくる街」であり、かえで幼稚園（横浜市青葉区美しが丘3丁目）の周辺には春には「すみれやれんげの咲く野原があり、秋にはあけびが実る山道がありました」と記されております（『楓園』第10号より）。

創設当初の園庭はその赤土の延長にあり、その土の上には木々も草花も育っていないことが創設当初の写真（上掲左）からもうかがえます。園の営みは庭に限らず園舎の中でも豊かに展開してまいりましたが、このたびの『史料室だより』には、庭から始まりその庭で生まれ育まれ創り出されてきたものをふりかえることにより、かえで幼稚園の「歴史（歩み）」と「らしさ」と「これからへの希望」を述べてみたいと思います。すべてを支えてくださった神さまと、宣教師の先生方の祈りと、また多くの学院に連なるの方々からのお支えに感謝して、この記事をお届けします。

## 1、何もかも新しく伝統が無いところからの始まり

創設時を書いた記事の中から子どもたちが「人工的にできた新興住宅地で、教育熱心な保護者に管理されがちであった」ということが受け取れます。その子どもたちの姿を、創設4年目に発行された本園の『保育レポート』第1号において、当時の園長（短大学長事務取扱兼任）黒田成子先生は「たくましさや積極性に欠け、自分1人の殻にとじこもりやすい」園児たちと記し、当時の主事（短大教授）飯田泰造先生は「被管理的傾向が目立ち、逞しさや活力の乏しさが見られ、云われなければ行動を起こさないなどの非積極性」や、「情緒的なものへの反応の弱さが認められ」「遊び込む姿が見られないことに対してどのように対処していったらよいかが当面の課題となった」と記しています。また、初年度より長く保育主任をし、後に園長となった土橋克子先生は「楓園」第10号で、「ブランコや滑り台などの遊具に子どもたちが群がり、長蛇の列が出来ている中で、園庭の中央がぽかっと空いていました。また十平方メートルほどの砂場は子どもたちで満杯でした。屋内でも積木や玩具が使い易いように置いてあるにもかかわらず、椅子に腰かけてハンカチで遊ぶ子どもたちでした。どんな遊びを展開するか私どもは期待していただけに、それは驚きでした。この事実から家庭環境の中で受け身となっている子どもの姿を知らされ、また一方では子ども同士、横の仲間関係が希薄で、遊びがないことを気づかされたのでした」と記しています。土橋先生はその後に続くことばとして「『何もかも新しい』とは環境ばかりではなく、伝統がないことでもありました（傍線筆者）」と述べています。

## 2、庭に生まれていった様々な遊びの場・遊具…そして遊び

前述の『保育レポート』第1号の中で、飯田先生は「子どもたちが真に求めているものは、やはりそれが人間の本来の姿である所の自由<sup>ゆ</sup>に遊<sup>あ</sup>ぶることであつた。自由の場とは子どもが自分たちの世界をつくれる場であることで、そこは、多少の抵抗を味わいながらも自分を試めせる場であること、そこには試みたり、確かめたり、挑んだり、冒険をしてみられるなどの行動を起こせる場であることを含んでいる」と考えて見直しを行い、不備を見出して改善の実践を述べています。その中より3年目までのこと

を以下に挙げます。

### 〈1年目 1973年度〉

- ・初期に用意した狭い10平方メートルの砂場に群がっている子どもたちは、一見楽しそうにしゃがみこんではいるが、深く取り組んでおらず、子ども同士の関わりも無いことに課題を感じ、一挙に10倍に拡張。その結果、遊びに勢いが生まれ、子ども同士の様々な関わりが生まれる。
- ・園庭に直径40cmぐらゐの丸太や切り株を運びこみ、置く（ころがす）ことで、その上を歩いたり跳んだりする遊びが生まれたり、丸太への釘打ちが始まる（これが本園の木工活動のはじまり）。

### 〈2年目 1974年度〉

- ・夏休み中に教師たちで六尺丸太数本を地面に打ち込み「掘立て小屋」の骨組みだけを用意しておいたことから、2学期になって子どもたちとの小屋作りが展開。子どもたちが板を鋸で切りそれを丸太に釘で打ち付けて壁をつくり、教師たちが屋根を付けて完成。小屋の中でのままごとや、小屋の屋根登りなどの遊びが生まれる。遊びが平面から立体へと変わっていくきっかけともなる。

### 〈3年目 1975年度〉

- ・ある教会の青年会と教会学校生徒のサマーキャンプにて、園庭に高さ5メートルに及ぶ砦が造られる。これを子どもたちは「かえでタワー」と名付ける。高さのある遊具が庭に加わったことで、ここを核にして子どもたちは様々な遊びを生み出し、自分たちの世界をつくっていくようになる。
- ・9月に保護者に向けて「遊び場づくりのお願い」の趣意書を配布し、その後の6回の土曜日に、父親・母親・卒業した小学生たち・そして園児も交えての遊具作りを実施した（長さ8m直径30cmの電柱の平均台・長さ8mの杉丸太の登り棒・丸太のつり橋など）。

上記の初年度からの3年間の実践が、その後の庭の遊びの環境を創り出し、さらに保育を深め子どもを育むことへの土台となって2023年度の現在につながっています。「遊び場づくり」は「つくろう会」となり、学生や5歳児父親との「ワークの日」となり今も続いています。屋根登りのできる「ままごと小屋」や「かえでタワー」は何代にもわたって作り直され、今も子どもたちの大好きな場です。また、大きいものから小さいものまで、ワークや日常の木



砂場で遊ぶ子どもたち（2010年）

工活動により保護者・子ども・教師が作った遊具や遊び場が、子どもたちの自発性・深い取り組み・関わりを支えています。

その場所での遊びとその周りでの遊び（泥だんご作り・虫さがし・鬼ごっこ・木登り・かけっこ・ダンス…）が、子どもから子どもへと伝わり、いつのまにか本園の「伝統（本園の遊びの文化）」となっています。庭にもそして保育室にも多くの遊びの種火が消えることなくあり、子ども同士の同年齢・異年齢の関わり合いがあることが、何もかも初めての創設時とは比べものにならないほどの安心と遊びの深さを支えていると思います。

### 3、木が根を張り大きく伸び、四季の草花が咲き、 神さまからの命を受け取る庭へ

かえで幼稚園の庭に一歩足を踏み入れた方の多くが、木々の緑と季節の草花に「ほっとさせられます」とつぶやかれます。私自身もその一人です。ほどよく雑草も生えていて、けっして整備され手入れが行き届いた庭ではありませんが、ここに神さまの創造されたいのちの不思議さやおもしろさや美しさを感じとることのできる世界が少しずつ少しずつ育てられてきたことに感謝します。

50年前、切り開かれた土地の赤土の上に建てられた園ではありましたが、雑草はそこにもたくましく芽を出していたようです。初年度からの教師であった関根千代子先生の一文の中に、かえで幼稚園が開園する少し前のある日のこと、「私が園に着きますと、もう長野先生はおみえになって庭の草むしりをなさっていらっしゃいました」というくだりがあります（『かえで幼稚園創立十年のあゆみ』より）。長野彌元院長が、折々に園を訪れ、アジサイやスグ

りやブドウの苗を植えられたり、クズの葉の生い茂る西側斜面の草取りをしてくださっていたことを伝え聞いてきました。草木が根付いていない庭に、手を入れ、苗木を植えてくださった初めの時があったことを忘れずにいたいと思います。

その後、庭にはたくさんの種類の木が植えられました。また花壇ができ、子どもたちとともに種を播いたり、花の苗や球根を植え育てました。庭の一角には小さな畑も作られ、季節に合わせて野菜作りも楽しんでできました。横浜市の緑化事業により園庭の中央に芝生も敷かれました。

年に数回の植栽業者による手入れはあるものの、この庭を愛し構想をもち守り育ててきたのは、元園長の土橋克子先生と森高ホサナ先生のお二人です。土橋先生は、ご両親の影響もあり樹木や花に関する知識が深く、一本一本を大事に増やしていかれました。保育が楽しくなるようにと実のなる木も多く置かれました。森高先生はガーデナーとお呼びして良いほど庭作りのセンスに優れ、花壇の花を美しく植え、庭のそこここにバラのアーチやガゼボを置き、四季を通じて楽しめる庭を作ってくださいました。森高先生が西側の斜面に子どもたちと植えられた黄水仙は、毎年卒業の季節を彩っています。

創立10年目、土橋先生は『短大だより』（1988.4）に「かつて細い一本の棒切れだった数本の桜の木が春には見事な花をつけ、夏には大きな木陰をうつしてくれるまでになり、蝉がシンフォニーを奏でてくれる」と記しています。創立40年目、森高先生は『保育レポート』第20号（2013.3）の巻頭に、創設当時に植えられた若くて細い木々を思い、「40年の月日が流れ、子どもたちが木登りできるまでに、木はしっかりと根を張り大きく育ちました」と記しています。

その木陰はますます大きく広がり、私たちに憩いの場を与えてくれています。鳥たちはその枝に休み、時には巣をつくり雛を育てます。木の下の花壇には、多くの虫が集まり、特にダンゴムシは子どもたちの親しみの存在です。木登りができる木、梅・キンカン・ミカン・ブドウ・姫リング・キウイ等の実のなる木、花の咲く木、色づきや落葉を楽しめる木…。子どもたちは、季節ごとの自然の恵みを感じ、自然を楽しみ、教師とともに「神さま、ありがとうございます」と賛美しています。



木々や草花により豊かに彩られる庭

#### 4. 子どもも大人も集い交わる庭へ、そこから巣立ち帰ってくる庭へ

##### かえでの庭

##### 1. 美しが丘の坂の上 光かがやく庭がある

神さまに愛された 私たちの庭がある  
歌声あふれる かえで幼稚園

##### 2. 美しが丘の坂の上 風がそよぶ庭がある

神さまに愛された 私たちの庭がある  
主イエスと歩こう かえで幼稚園

##### 3. 美しが丘の坂の上 友だち集まる庭がある

神さまに愛された 私たちの庭がある  
喜びひろげよう かえで幼稚園

この庭から巣立っていこう それぞれの明日へ  
光の子として

(作詞・作曲：大瀧知子 1997年)

創立25周年に幼稚園歌とともに作られた「かえでの庭」は、父母の会のコーラスサークルの中や教師たちの賛美として歌われてきた歌です。かえでの庭に集い交わるのは、在園の子どもだけではなく、日々子どもの送り迎えをしている保護者の方々は、園庭に面する各組の入り口前で子どもを送り出し迎え入れますが、その折に庭に注ぐ光と風の中、子どものことを思いめぐらすとともに、そこで出会う方と挨拶を交わしおしゃべりをされてつながっていきます。やがて、その場は子どもたちだけのものではなく、保護者たちにとっての庭にもなっています。近年では、未就園児の親子が訪ねて来る幼稚園開放の日を毎月2度ほどもち、地域の方の庭のひとつにもなっています。

卒業した子どもたちが、時折「ちょっと遊んで良

いですか？」と幼稚園に帰って来ることがあります。また保護者（特にお母さま）がひとりで、または数人で「ここで深呼吸させていただきたくて来ました」と戻っていらっしゃり、ひととき木陰のベンチに座って過ごすこともあります（時間の許す時には私もそこに座り、お話に耳を傾けることをします）。

かえでの庭は、一人ひとりが今を生きている場であり、巣立っていった子どもや保護者（そして教職員）にとって人生の原風景となっている場であると感じさせられています。そこが出発点のひとつであり、時折帰るふるさとのような存在です。

少し前のこと、ある子どもが小学校の作文に「ぼくがこの街で一番好きな場所はかえで幼稚園の庭の小屋の屋根の上です」と書いたと聞きました。なるほど、屋根の上で気持ちよさそうに空を見上げ庭で遊ぶ友だちをながめている子どもたちの様子はとても幸せそうです。また、時にはひとりになって自分を取り戻しているのだなと思える姿もあります。

私が長年感じていたことがあります。それは、とても感覚的なことですが、かえでの庭は特別な光に包まれ、特別な風が吹いていると感じます（私だけではなく、多くの方がそう感じているようです）。私は、それを神さまからの愛であると思ってきました。神さまに愛され守られる中、自分らしさをもって人とつながることのできる場がここに 있습니다。

これからもこの庭の春夏秋冬が、神さまからの光と風を受けて、多くの者の安心と希望を紡ぐ場であり続けますようにと希望をもち祈ります。



子どもと保護者の集う庭。ワークの朝の礼拝で讃美歌を歌う子どもたちと父たち（2023年）

この秋、かえで幼稚園創立50周年記念写真集を刊行します。お問い合わせは、かえで幼稚園まで。



現在のアスレチック広場



2011年のワーク（学生と村上教授）

東洋英和女学院大学の構内にある「アスレチック広場」は、学生たちの自主的活動から発展した、手作りの遊具で構成されている保育研究スペースである。豊かな自然に囲まれ野趣溢れる空間は、子どもたちに創意工夫する感覚を呼び起こす。横浜校地であるからこそ展開されたともいえるこの広場について、発端から関わっていらした村上哲朗教授をお訪ねし、成り立ちと意義をうかがった。

（インタビュー日：2023年6月12日）

—まずアスレチック広場の始まったいきさつをお聞かせください。

村上哲朗先生（以下「村上」） 一元々は2000年5月、近藤充夫先生が幼児体育の科目を担当していらした時に、体育館の前に「アスレチックコンビネーション」（劣化のため2008年度撤去）という遊具が設置されて、先生も授業で学生に体験させていらっしました。あのあたりは木が密集して生えていて害虫も多く鬱蒼としていたので、周辺を間引きすることになって木を伐採したようでした。伐採されて積み重ねられていた木を見て、何人かの学生から切った木もったいなからベンチや子どもがちょっと遊べるような簡単な遊具でも作りたいと声上がり、製作が始まったわけです。有志の学生たちの人数もだんだん増えていって活動が大きくなっていくと、大学に正式な許可を得ていない個人的な活動であったことから、管理体制や活動承認手続きの不備が問題となり、製作活動は一旦停止となりました。しかし、いたずらに遊んでいたわけではなく、学生たちにとっても、遊具のことや安全性についてよく理解できることは、保育現場に携わった時にとっても意義があると思っていました。そこで、日本公園施設業協会の方に大学に来校していただいて、大学の事務担当者と一緒にアスレチック広場を見てもらい、注意点や配慮の必要な部分についての指導をいただくと同時に、大学内の施設として学生の学ぶ場が確保される価値と奨励の言葉をいただいたんです。それから、小金井公園で行われた協会の製作安全講習会を、特別に受けに行かせてもらいました。そこでお会いした公園業者関係の方たちからも「それを大学で！」と絶賛してくれて、ぜひ保育現場に赴く学生

たちにも理解してほしいと、講習会特別参加に快く受け入れていただきました。

—学校内にこうした教育用の遊具があるのはとても珍しいことなのですね。

村上—恐らくは、ほばないように思います。なんとか研究活動の場として認めていただけることになり、2006年の12月に正式に申請書を提出して、ちょうど保育子ども専攻の発足した2007年度から研究活動が認められました。2007年度は総合演習の中で「遊び場プロジェクト」として活動を進め、2008年度にフィールドワークC「遊具製作と遊び場」で授業として始められることになりました。この年から作業工程を含めた製作活動報告書を作成して研究活動の年次報告として全部残してあるんです（ただし、コロナ禍期間は活動制限）。

—学生たちの自発的な活動が汲み上げられて、カリキュラムに組み込まれていったわけですね。

村上—学内の先生がたが理解してくださって、大学も受け入れてくれました。ただ、アスレチック広場の使用の仕方については、いつも開放しているわけではなく、遊具を含めての研究場所なので、整備したものについて、子どもたちがどんなふう遊ぶのか、その姿を見ることも含めて、私や学生がちゃんと付いてないといけません。生涯学習センターの講座「親と子どもの体操」の遊具遊びでもそのように使っていますし、大学付属のかえで幼稚園や近隣の天使幼稚園が来るにしても、看板に書き入れてあるように、ここは子ども用のアスレチック広場で、使用に際して何かあったとしても自己責任と理解された上で活用していただくようにしています。かえで祭（大学の学園祭）における広場の開放でも学生た

ちが必ず付いて安全管理を徹底して遊びの風景を見守っています。

—自然が残された環境で、遊具も手作り感が高いものであるけれども、ちゃんと安全面を整備して展開したということですね。

村上—そうですね。子どもたちは公園にある鉄でできているようなものより、手作りでちょっと扱いづらいものを上手に遊ぶんですよ。ワクワクしてその空間を楽しんでいるというのは、やはり手作りならではのもので、こんな空間は都心ではあまり見られませんね。

—先程拝見しましたが、斜面に作ってあるスライダーも、なかなかないものですよ。

村上—地形を利用したすべり台です。最初はもっと大規模で、最後は裾が広がるように枠を広げて作ったんです。一番人気でした！今は整備中です。プラスチックのそりに乗って滑るんですが、KURE5-56（潤滑スプレー）を滑走面にふんだんにスプレーして滑るのでめちゃくちゃ滑ります（笑）。予想を超えるスピードに悲鳴も上がります。

—それは面白いでしょうね。やはり子どもにとっても、こういう環境はなかなかないから非常に喜ぶわけですね。

村上—そうですね。公園遊具は安全規格が決まって設置されていますから。こちらは本当にワイルドです（笑）。

—また、ゴムホース製のブランコを拝見しました。

村上—これはスツと子どものおしりがホースの台座に適度にはまるようになってます。実は、安部幼稚園という幼稚園で拝見して、子どもたちは一人ひとり体の大きさも違うし、平らな板の台座ですと小

さい子のお尻はずれ落ちてしまいそうになるけど、これならスポンと入っていいなとアイデアを頂きました。

—こうしたアスレチック広場での経験を経て、授業でいろいろなところにフィールドワークに行くと、学生たちは遊具をどういうふうにするのかという視点で見ることができるようですね。

村上—はい。学生たちは、大学が位置するこの緑区の公園を全部見て調査をしたんですよ。遊び場や遊具をつぶさに調査をして総合演習で発表しました。本当に全部回ったんですが、これはなかなかできることではないなと思っています。

—保育関係の学会でも発表できる実績が蓄積されているのではないですか。

村上—はい、そう思われるほどのものでした。報告も製作した公園マップも残してあります。

—製作用の道具などはどうなさっているのですか。

村上—授業としての活動には予算がつくので、それで木材や道具をそろえます。予算限度もありますので、活動期間、学生たちの人数や構想と企画を鑑みて、その枠の中で考えます。受講した学生たちは、子どもと一緒に製作できたらいいなという希望も持っているようでした。

—先生は、設計もなさっていますよね。設計っていきなりできるものなのですか？

村上—いきなりできますねえ（笑）。私自身が子どもの頃、外で遊ぶのが好きであちらこちらに遊びに行っていましたから。いろいろな遊び環境で遊びましたし、ちょっと危ないことが好きな子どもでした。子どもの遊び場にあってほしい遊具の発想やアイデアに役立っているのかもしれない。



秘密基地



ターザンロープ



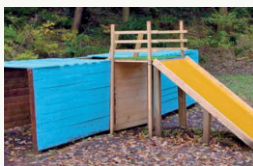
タイヤブランコ



すべり台



ホースブランコ



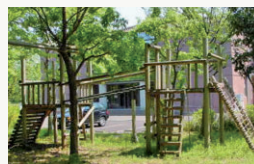
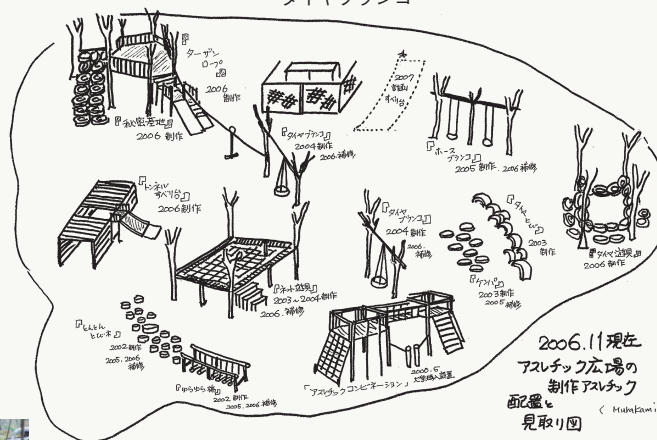
トンネルすべり台



ネット遊具



ゆらゆら橋・とんとんとび木



アスレチックコンビネーション



タイヤとび・ケンパ



タイヤ遊具



—先生ご自身の体操競技での経験から、器具などのメンテナンスをご覧になる時、安全の重要性を肌で感じることはできないのでしょうか。

村上一そうですね。あとやっぱり公園施設業協会の講習を受けに行ってお勉強してもらったのが大きいですね。

—保育で本当に一番怖いのは子どもが怪我してしまったりすることで、危険を察知する感覚が大事ですよ。

村上一自分たちも実際にその遊具で遊んでみて、どれ位滑るか、幅や高さはどうか、釘などが出ていないか、それらを子どもの目線になって捉えてみて、不安定な体つきと判断力がまだ備わっていない部分を持ち合わせている子どもたちが遊ぶとすると、どんな配慮が要るか、理解する必要があります。

—でもそれは座学だけでは学べませんし、村上先生ならではの教授方法でしたね。

村上一その場所と機会を与えてもらったのが一番で、大学の許可を頂いたことに感謝しています。

—授業以外では遊具のメンテナンスを先生がしてくださっているのではないかと卒業生が話していました。

村上一ほとんどは、遊具のメンテナンスは学生と一緒にしています。ただ、大雨や台風などの後では木が折れていたりするので、点検に行ってお勉強のついでには手を入れることがあります、私だけでは手が回らないので、みんなの力は必要です。毎年、新しい製作の前に既存の遊具のメンテナンスから入ります。

—メンテナンスも学生と一緒にというのがいいですね。授業の教材はどうされていますか。

村上一授業で使う教材は「日本公園施設業協会」から発行されているガイドブック（遊具の安全に関する基準）を参考にして、これまでの製作活動の報告書と合わせて授業教材にしています。

—この見取り図（7頁に掲載）は先生がお描きになったのですか。

村上一ええ、小学生の頃から漫画家になりたかったんです（笑）。だいたい頭の中で思い描いていて、線で描くと設計図になっているんです。それに対して、具体的にはどういう材料を使うか、どんな大きさや構造にするかとイメージができあがっていきます。時間があればビバホーム（ホームセンター）の木材コーナーに行ってお勉強しています。「この木材がいいな」なんて。入り浸っているということが当てはまっているかもです。

—先生のゼミ生からお話を伺ったのですが、先生の授業では親子の体操講座等で子どもと実際に触れ合

う機会があり、また遊具のメンテナンスにも関わるといことで、現場にいつ出ても大丈夫な教育をしてくださったと感謝していらっしゃいました。

村上一教わるのは簡単ですが、教わるだけでは身につけません。自分たちで考えて想像を形にしていく実際の過程があって現実が見えてくると思います。思いのほか限界も分かってくるし、それでもやりたいことがある時にどうするか。

—そこは「感覚」が大事になってきますね。

村上一はい、大切なのは「適正な感覚」です。「これぐらいいいや」は怪我に結び付く。「こうじゃなきゃ」でちゃんと成果につながる。そこをきちんと見極められるようなことがワークの中から一つでも学べれば良いと思います。途中で諦めてしまうと出来上がらないし、天候にも左右されて思うようにはいかない。そこも大事なところ。本当にこの大学は、都心から遠いかもしれないけれど生きた学びのためには恵まれている環境だと思います。

—保育者には、怪我をさせない野生の勘のような「ここまでやっては駄目！」という感覚が必要ですよ。

村上一そうですね。以前、学生たちが2歳児の親子体操に係わっていた時のことなんですが、曲がり角を作った2台の平均台をある子どもが渡り始めると、1人の学生がさっと走って行ってつなぎ目となっている角に立ったんです。多分バランスを崩すだろうと。案の定その子はバランスを崩して平均台から落ちそうになったんですが、学生の補助でこたきを掴みました。これはアスリートの感覚じゃないけれど、ここが危ないと予測できるようになったのは、子どもが遊んでいる姿から自分も学んで、子どもの不安定さや能力も考えに入れての行動を取れたということ、いろいろなことを予想できる活動の成果だと思います。

—この遊具を使った保育研究は全体がとてもよくできたプログラムになっていることがよくわかりました。

村上一そうですね。今、こういう時代だからこそ貴重なんでしょうね。20年位活動してきましたが、毎回の活動が新しく、学生たちも回を重ねるごとに意識が高くなって責任感が強くなっていく様子が見て取れます。投げ出してしまうこともなく本当に一生懸命。力仕事もしっかりやるし、活動に前向きになる人たちがばかりなので継続できたのでしょう。「ここは、この釘じゃダメ！3寸のじゃないと。」ですって。

—そこまで学生たちが成長していくのですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。



村上哲朗（むらかみ・てつろう）人間科学部保育子ども学科教授

日本体育大学、同専攻科、同大学院体育学研究科（体育方法学専攻）を修了。同大学院と体操競技研究室の研究員として在籍した後、東洋英和女学院短期大学に横浜校地移転と同時に体育講師として着任。短期大学部募集停止後は生涯学習センターに所属、2001年度から大学所属となり現職に至る。専門は体育方法やスポーツコーチングで、2000年シドニーオリンピック大会の体操総監督を務めた。学内においては、保育子ども学科の専門科目における、主に体育実技や健康の指導法（身体活動）を担当してきたが、特に特徴的な講座としては、キャンパスを活用した親子の体操講座やアスレチック作りのフィールドワークの授業が挙げられる。2024年3月、38年間の奉職を以て定年退職となる。

わかばやしりう  
卒業生初の教員・若林里雨

若き日に東洋英和女学校に学び、婦人宣教師から薫陶を受け、母校で教員として働く機会を得た卒業生には、宣教師と生徒の架橋、後輩の模範としての役割が期待されただろう。1890（明治23）年1月に着任し「英語・訳読」を教えた若林里雨（1871～1945）は最初の卒業生・教員であった。『東洋英和女学院百年史』では「卒業生最初の教員」と記されるもそれ以上の情報は見出せない。そこで140年史編纂で明らかになった彼女の略歴を紹介したい。

里雨は1871年に若林百之助・もせの長女として神奈川県南多摩郡下小山田村に生れた。祖父・有信は村を代表する名望家で、僚友の石坂昌孝が指導する自由民権運動を支援し、1882年に長男・百之助を自由党に入党させた。1896年に石坂が群馬県知事に就くと百之助の長男・俊之助が秘書を務めた。若林家は横浜と「絹の道」でつながる三多摩地域で三代にわたる民権一家であった。里雨が入学した1885年に父が納めた地租額は村一番で、石坂家に並ぶ資産家であった。石坂の次女・トシ子も英和の同窓生であった。

欧化主義の時代に開学した東洋英和には岩倉・伊藤・山尾ら政府高官をはじめ上流階級の令嬢が多く通い、鹿鳴館で外国の要人に応対できる語学力と教養を身につけた女性の育成が求められた。だが、若林家のように地方の資産家として民権運動を支持し、自由党员となり議事に臨む準備を進め、政府と対立する豪農層も存在していた事実は注目に値する。

当時、国家歳入に占める地租の割合は6割を超えた。米や生糸を売り現金での納税を課せられた農民層は生活や土地を守るため、経済・外交政策に敏感に反応した。政府を的確に批判し政治・社会を善導するため、国際情勢や西洋文化を学ぶことに努めた。ゆえに、おもに英・仏の自治領民で形成され、明治維新とはほぼ同時期に英国自治領として成立したカナダ連邦から派遣された婦人宣教師の学校に娘を預けたのであろう。

勉学に励んだ里雨は1888年12月に第一回普通科（日本学）卒業式を松井幾子らと迎え、翌年12月には唯一の第一回英語科卒業生として証書とウェブスター大辞典を授与されている。最初の「全科卒業生」として母校の教員となり、1893年5月まで勤めた。

1896年、里雨は石坂家に入出入りしていた平野友輔の媒酌で渡邊為蔵と結婚した。為蔵は明治中期に「平民主義」を唱えて青年層に支持された徳富蘇峰の右腕として国民新聞社に勤めていた。里雨は1896～97年に同窓会委員を務め、1897年7月に長女・里枝、1900年1月に次女・千鶴代を産み、1903年11月に母校に復職した。

『東洋英和女学校五十年史』に里雨が記した「カアトメル先生」には卒業生・教員ならではの愛慕の念が溢れている。「先生の偉大さは、組織的の才能とか経営の腕とかいふ所に在るよりも、寧ろその愛情と信仰に在りました。それだけに私共がその御人格から受けた感化は大きなものでありました」とある。では、里雨はどのような教員だったのか。その様子がわかる史料には辿り着けていない。今後も調査は続けていくが、ご存知の方は是非ご一報ください。

【付記】本稿の作成に際し若林里雨の曾孫・青木豊氏（里雨の次女・千鶴代の令孫）よりお話をうかがうと共に、貴重な資料（本誌10～11頁で紹介の『はなかたみ』含む）をご寄贈いただきました。記して感謝申し上げます。

水谷 悟（静岡文化芸術大学教授／『東洋英和女学院140年史』監修／本学非常勤講師／元 本学院中高部社会科教諭）



若林里雨 肖像写真  
（上：表面、下：裏面）  
表には「Our 1st Graduate Dec./89」  
裏には「To Miss Cartmell from Riu  
Wakabayashi」と書き込みがある。

# 〈資料紹介〉43 卒業生 渡邊里枝遺稿集

## 『はなかたみ』が語る英和生の日常

上品な桜色の糸で綴じられた【写真1】の冊子は、1933（昭和8）年9月20日に37歳で亡くなった卒業生・渡邊里枝（1915年本科〔邦語科・英語科〕卒）の遺稿集『はなかたみ』である。母・里雨（本誌9頁参照）の記した「はしがき」によれば、死後2年経った1935年の夏、家の改築に際し娘の勉強部屋から学校の宿題で書いた日記が見つかった。そこで「取り纏めて保存致せば、早く母に別れた子女等が、幾分か母なる人の少女時代の<sup>（おもかげ）</sup>の俤を偲ぶよすがともなり、又その生ひたちの質実勤勉で、其心ばえのやさしい点に幾分でも習へば、此上もない仕合せと、学校の作文の二三を取添へて、小冊子と致したという。その構成は次の通りである。

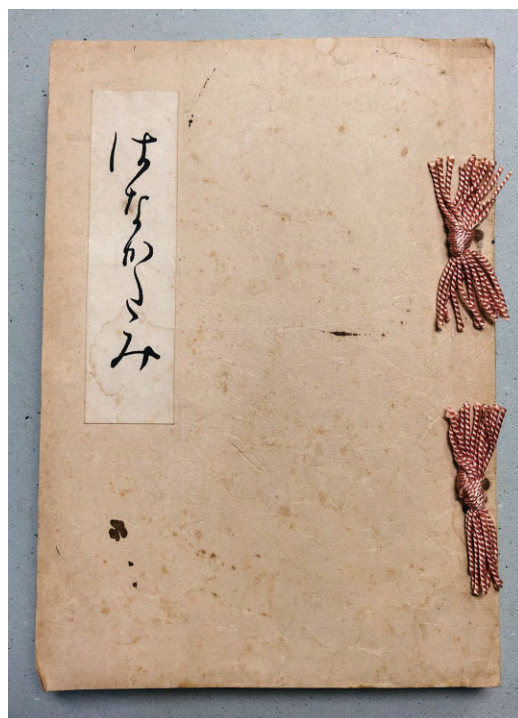
- ①里枝の写真：「日本学科卒業記念（大正四年）」を含む5点
- ②「はしがき（母 里雨しるす）」
- ③日記：「明治四十四年七月暑中休暇日記」（本科二年）、「明治四十五年」（ッ）、「明治四十五年暑中休暇日記」（同三年）、「大正二年暑中休暇日記」（同四年）
- ④作文：「紀行文」（本科三年）、「我が生ひ立ち」（同四年）、「初秋」、「立秋の宵」、「忘れがたき事」（同五年）
- ⑤「渡邊里枝様をおくりて クラス一同に代りて」（飯田壽賀子）、「学校時代の里枝様」（赤木芳子）、「里枝は召されました」（昭和八年度同窓会報より 里雨子）

紙幅に限りもあるため、今回は主に③日記のうち、本科二年次の2種類に絞り、当時の英和生の日常を紹介していきたい。

七月十七日 月曜日 晴天

五時に床を離れて、玄関のお掃除をすまして、七時頃お琴のお稽古に行きました。それからお習字やお裁縫を致しました。夕方になりましてからは、奥のお座敷を片づけ、妹の髪を洗ひました。八時半に床につきました。

まず「明治四十四年七月暑中休暇日記」には7月17日～9月7日の日記が収録されている。約50日間に及ぶ記録を見ると、朝5時に起床し、玄関を掃除した後、7時に琴の稽古に出かけることを日課としている。そこから習字・裁縫・読書のほか、英語や漢字の書取・読本の暗誦・歴史の復習・図画・日



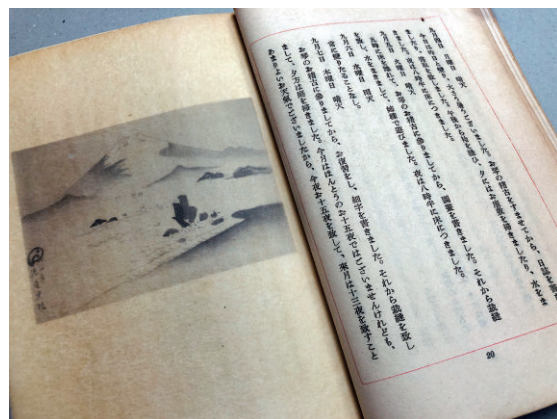
【写真1】『はなかたみ』表紙

記など学校より課された宿題に日々励んでいる。

八月二日 水曜日 晴天

五時に床を離れ、ぞうきんがけを致しまして、お稽古に行き、帰りましてから三越へ行きました。妹の夏帯を買ひまして、私にはりボンとつめ箱を買って下さいました。夕には水をまきまして、八時半に床につきました。

その一方、二学年下の妹・千鶴代（1917年本科〔邦語科・英語科〕卒）とお人形やお飯事で遊んだり、妹と女中とお人形を買いに浅草へ行ったり、三越や白木屋など日本橋の百貨店に出かけて着物の帯やり



【写真2】里枝氏の書画が随所に掲載されている。



【写真3】 宣教師の先生がたと校舎の前にて。1915（大正4）年頃に撮影。前列一番右が渡邊里枝

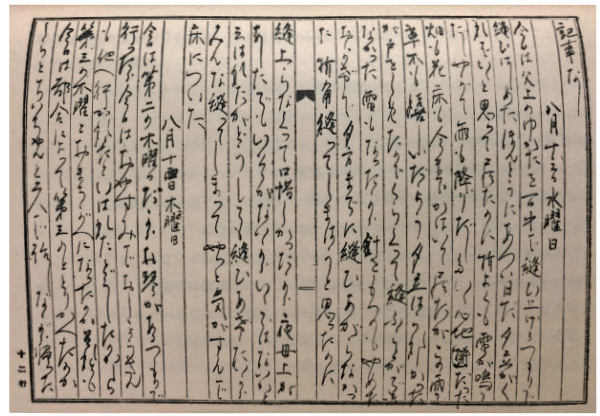
ポンを買ってもらったり、朝顔の品評会に行行って花を愛でたり、浅草・花屋敷で人形芝居を堪能したり、神田・錦輝館で活動写真を鑑賞したり、鎌倉の大仏や鶴岡八幡宮を見学したりと、長期休みならではの時間も満喫している。そして夕方には庭の草木に水をやり、『少女の友』『少女世界』など当時人気のあった少女雑誌をめくり、夜8時半～9時には「就禱」している。

続く「明治四十五年」（本科二年）には1912年2月1日～4月28日の日記が収められている。ほかの日記が「暑中休暇」の宿題であったのに対し、学期中の様子をうかがい知ることのできる貴重な史料と言える。2月9日の記述を見てみよう。

…事務所について居る点の平均点は、田邊さんが八十五で、伊藤初枝さんは七十九ださうでございます。私は七七、五で伊藤さんに負けて仕舞ひました。これから一生懸命に勉強しようと存じます。加茂さんはお休でございますから、たぶん田邊さんが一番におなりになるでせう。

ここには夏休み中の豊かで穏やかな日々とは異なり、級友たちと成績を競い合う日々が映し出されている。当時、「事務所」で試験の結果を閲覧する形を採っていたのか。各教科で点数を比べ、誰がよく出来て、自分は全体のどの位置にいるかを気にする姿は現代にも共通するものがある。さらに日記の続きを読み進めていこう。

英学のミスブラックモアの読の時間に、大友さんがこの前の書取をお読みになりました時ちがって居ていろいろお叱られになり終にお返事が出来なくなり、事務所でもお叱られになりました。ほんとうに大友さんもおかわいさうになり、私もこわくなって「事務所へ行って私の行くまで待って居らっしゃい」と先生がおっしゃいました時私までが胸がどきっと致しました。英語の授業でミス・ブラックモアに厳しい指導を



【写真4】「大正二年暑中休暇日記」

受けた同級生に同情しながらも、明日は我が身と復習を怠らず、試験に備えて夜遅くまで勉学に勤しんでいる。よりよい点数、さらなる向上をめざす意欲と実践が示されていた。それでは、当時の試験問題とはどのような内容だったのだろうか。3月12日（火）の日記に次のような記述が見出せる。

…歴史は「鎌倉、室町、江戸の三幕府を比較せよ」と「東山時代と南北朝の分立と合一の時期」と「関ヶ原の軍の時に名高かりし二夫人と小牧の戦の名高き理由」との五題でございました。

三つの幕府の比較に欠かせない項目とは何か。天下分け目の合戦であえて「夫人」に注目し、小牧・長久手の戦いの「名高き理由」に言及するにはどのようなアプローチが正解なのか。「一問一答」式に重要（とされる）人物や事件を単語・記号で答える傾向の強い現代の試験に比べ、明らかに問われる内容の広さや深さが違う。生徒たちには、日頃の授業への取り組みに加え、自ら関連文献を読み、歴史や社会を洞察する姿勢が求められていたのであろう。

ほかにも、『はなかたみ』には学院の歩みをふり返る上で重要な記述が多く見出せる。今回は紹介できなかった「明治四十五年暑中休暇日記」には明治「最後」の夏を英和生がどう過ごし、その心情を綴ったのか。また「大正二年暑中休暇日記」【写真4】には、学期中は「家事のことが中々出来ないから、お休中に一生懸命に習はう」と思い立ち、カツレツやキャベツ巻きなど炊事に挑む姿が書き留められている。当時の英和生の日常を復元するのみならず、近代日本の生活文化を考察する上でも貴重な時代の証言となるだろう。詳細については近く別稿にて論ずる予定である。

水谷 悟（静岡文化芸術大学教授／『東洋英和女学院140年史』監修／本学非常勤講師／元 本学院中高部社会科教諭）

## 〈東洋英和の先生がた〉11 津守 滋 先生



### 外交官の実績と歴史的洞察から

### 論じられた国際関係論

#### 南大阪の大秀才、三つの最難関試験に合格

東洋英和女学院大学の津守滋名誉教授（以下、先生）は、泉州の泉津市のご出身で、同じく南大阪で幼少期を過ごした私にはそれなりの親近感を覚えて下さっていたようである。私に当時の国鉄阪和線や南海高野線の沿線の土地勘があったことから、16歳の年齢差を気にする風でもなく、たびたびご郷里の話題で会話が弾んだ。例えば、泉大津の地場産業であるタオル製造業が中国製品の進出で如何に壊滅的打撃を受けたのかを熱弁していただいたり、あるいは泉州特産の水茄子の食しかたなど、特段どうということはない話題も先生にかかると忽ち興味津々のストーリーへと変貌するのである。外見は謹厳実直そのものの先生だったが、興が乗ると熱血漢を感じさせる人物だった。そんなこんなで先生とは偶々地縁で繋がっていたという理由で、大変楽しい雑談の時間を過ごさせていただいた。とはいえ、先生は大阪有数の名門校である三国丘高校から京都大学法学部へと進学され、在学中に国家公務員上級職試験に合格された秀才であり、私などとは文字通り「格」が違っていただろう。それだけではない。卒業と同時に法務省に入省された先生は、そのわずか二年後に司法試験および外務公務員上級職試験にも合格され、結局キャリア外交官の人生を歩まれることとなった。わが国でも最難関と目される三つの試験すべてに難なく受かっていることを考えると、秀才の上に「大」を付けなければならないだろう。

外務省入省後はドイツ語畑を選択され、当時の西ドイツに留学、その後ミュンヘンやベルリンの総領事、クウェート大使などの要職を歴任された。この間、外務省から出向という形で内閣官房長官秘書官を務められ、また大阪大学や立命館大学の大学院で教鞭を取られてもいる。単なる外交官という立場を超えて、広く官界や学界に人脈を構築されていたのである。先生は2002年ミャンマー大使を最後とし

て外務省を勇退され、翌年その見識を評価されて東洋英和女学院大学に招聘された。

#### 女子学生から生涯学習受講者までわかりやすい講義

大学では国際社会学部国際社会学科教授として学部および大学院で国際関係論や国際開発協力論などの専門分野を担当されたが、キャリア外交官としての実践経験を踏まえた講義や指導は、20歳前後の女子学生にもわかりやすいと評判だった。一般社会人を対象とした大学の生涯学習センターでも、「領土問題とナショナリズム」や「揺れる北東アジアの国際関係」といったタイトルの講座を担当され、定年退職後も引き続き乞われて長く講師を務められていたことから、その内容が決して術学的ではなく親しみやすかった事実は明らかだろう。

外交官時代、先生は東西両陣営が厳しく対峙する西ドイツでのご勤務が長く、また在ソ連大使館でのご勤務も経験されたこともあってか、旧ソ連の動向に強い関心を向けておられた。事実上ソ連の後継国家となったロシアについて、ゴルバチョフやエリツィンといった指導者が親欧米路線を採って西側との協調に努めており、欧米もまたNATOの東方への拡大に腐心していた時期、先生が「こんなものはまやかした」と吐いて捨てるように呟かれていたことは忘れられない。国際政治史において、それぞれの国家の性向や本質は、政治・経済・社会といった諸条件と同等か、いやそれ以上にそれらの国家が置かれた地政学的要因によって規定されるというのが先生の信念だったように思われる。先生は常に、歴史の高みから現在を俯瞰する姿勢を貫いておられた。ロシアの本性についても、19世紀のいわゆるグレート・ゲームといった膨張主義や不凍港を求めて軍事力を振り翳した南下政策など、その基底部分を構成する地政学的欲求は帝政ロシアであろうがソ連邦であろうが、あるいはロシア連邦になろうが、変質するは

ずはないと語っておられた。ソ連／ロシアの軍事的発想についても熟知されていたのは、ご息女が翻訳したアンドリュー・ナゴルスキの世界的ベストセラー『モスクワ攻防戦－20世紀を決した史上最大の戦闘－』を監修された事実から伺い知ることができよう。

### 歴史から本質を把握し、世界の動向を見据える

果たして21世紀に入り、「20世紀最大の悲劇はソ連邦の崩壊である」と嘯くプーチンがかつての皇帝(ツァーリ)やスターリンにも似た独裁権力を握るや、ロシアはそれまでの韜晦や欺瞞をかなぐり捨てて19世紀さながらの膨張主義に回帰することとなった。2014年には一方的にウクライナからクリミア半島をロシアに編入し、2022年にはこれも一方的にウクライナ領内への軍事侵攻に踏み切った。津守先生は、クリミア編入時には温容を曇らせて「だから、ね？」と仰った切りだったが、ウクライナ侵攻を目撃することなく、その前年に逝去された。透徹した目で歴史から学び、常に事物や現象の本質を把握して世界の動向を見据えようとされていた先生から受けた教示は数えきれない。ここでは、2015年2月に実施された大学開学25周年記念パネルディスカッションにおいて先生が発題された「この25年は、国際関係史において何をどのように変えたか」の末尾部分を引用して擲筆することとしたい。

「総じて前世紀からフランシス・フクヤマの言う『歴史の終焉』を見ることなく、断絶することなく引き継がれた21世紀初頭の現在、伝統的な主権国家、国民国家の枠組みは、一方ではグローバリズム及びリージョナリズムの両方向からの挑戦を受け、他方ではこの枠組みを暴力的に破壊しようとするI S I Lの如き過激思想が頭をもたげている。

結論として、人類は誤ちを繰り返しながらも、少しずつ賢くなっていくものと信じて、大きな流れとしては21世紀前半の世界は、基本的には主権国家



大学院での授業風景（国際NGO関係者等による特別講義）

併存の体制を維持しつつ、民主主義、基本的人権の尊重を基礎に、法の支配の下に国際紛争を平和的手段で解決することを内容とする『ポストモダニズム』の時代に移行する過程と捉えられるのではないかと思います。そして最近のロシアや中国のような、古典的な、言ってみれば、モダン国家的な行動の余地はだんだんと狭められて行くのではないかと期待されるわけであります。」

池田 明史（前東洋英和女学院大学学長、  
東洋英和女学院140年史編纂委員）

### 津守 滋（つもり・しげる）先生 —略 歴—

- 1939年6月5日 大阪府泉大津市生まれ
- 1958年3月 大阪府立三国丘高等学校卒業
- 1962年3月 京都大学法学部卒業
- 同 4月 法務省入省（入国管理局）
- 1965年4月 外務省入省
- 1981年2月 経済局国際経済第二課長（OECD担当）
- 1983年12月 アジア局地域政策課長
- 1984年8月～ 在ソ連大使館参事官、在OECD代表部参事官、在ミュンヘン総領事を歴任
- 1990年5月 在独大使館公使
- 1992年1月 欧亜局審議官（この間、大阪大学大学院客員教授）
- 1994年9月 在ベルリン総領事（大使の称号を得てベルリンおよび旧東独全地域を管轄）
- 1996年4月 大阪大学大学院および同法学部教授、立命館大学大学院客員教授
- 1998年2月 在クウェート大使
- 2000年6月～2002年6月 在ミャンマー大使
- 2002年7月 退官
- 2002年10月～2003年3月 東洋英和女学院大学大学院社会科学部研究科 客員教授
- 2003年4月～2008年3月 同 国際社会学部国際社会学科教授（その間、2007年4月～2008年3月 大学図書館長）
- 2008年4月～2010年3月 同 大学院国際協力研究科 非常勤講師
- 2010年4月～2016年3月 同 生涯学習センター 非常勤講師
- 2014年4月 同 大学名誉教授
- 2021年9月29日 逝去（82歳）

## 利用統計 (2023年4月～2023年9月)

|             |           | 4月 | 5月  | 6月 | 7月  | 8月 | 9月 |
|-------------|-----------|----|-----|----|-----|----|----|
| 展示見学者数      |           | 83 | 100 | 96 | 169 | 45 | 59 |
| 展示見学者区分     | 学内関係者     | 38 | 31  | 33 | 42  | 8  | 12 |
|             | 一般        | 45 | 69  | 63 | 127 | 37 | 47 |
|             |           | 4月 | 5月  | 6月 | 7月  | 8月 | 9月 |
| 資料閲覧者数(累計)  |           | 9  | 9   | 8  | 10  | 7  | 7  |
| 閲覧者区分       | 本学学生・生徒   |    |     |    |     |    |    |
|             | 現教職員      | 4  | 2   | 1  | 3   | 3  | 3  |
|             | 旧教職員      | 3  | 2   | 2  | 6   | 3  | 2  |
|             | 同窓生・学院関係者 | 2  | 3   |    | 1   |    | 1  |
|             | 同窓生(研究者)  |    |     |    |     |    |    |
|             | 他校研究者・学生  |    | 2   | 5  |     | 1  | 1  |
| 一般          |           |    |     |    |     |    |    |
| 利用の目的       | 年史編集      | 1  | 3   | 4  | 7   | 5  | 2  |
|             | 著述・論文作成   |    | 2   | 1  |     | 2  | 2  |
|             | 伝記資料調査    |    | 1   |    |     |    |    |
|             | 記録類の調査・研究 | 5  | 1   | 3  | 2   |    | 2  |
|             | 学院広報関係    | 2  | 2   |    |     |    |    |
|             | その他       | 1  |     |    | 1   |    | 1  |
| 資料の種類(重複あり) | 東洋英和関係    | 9  | 9   | 8  | 8   | 6  | 7  |
|             | カナダの教会関係  | 2  |     | 4  | 1   |    |    |
|             | 村岡花子関係    |    |     |    | 1   |    |    |
|             | 周辺地域史     |    |     |    |     |    |    |
|             | その他       |    |     |    | 1   | 1  |    |
|             |           | 4月 | 5月  | 6月 | 7月  | 8月 | 9月 |
| 月別レファレンス件数  |           | 16 | 16  | 18 | 8   | 15 | 17 |
| 質問者の区分      | 本学学生・生徒   |    |     |    |     |    |    |
|             | 現教職員      | 10 | 3   | 10 | 4   | 3  | 8  |
|             | 旧教職員      | 2  | 3   | 1  |     | 4  | 1  |
|             | 同窓生・学院関係者 | 3  | 1   | 1  |     | 3  | 1  |
|             | 同窓生(研究者)  |    |     |    |     |    |    |
|             | 外部研究者・学生  | 1  | 5   | 4  | 2   | 4  | 5  |
|             | 外部研究機関    |    |     |    | 1   |    |    |
|             | 一般        |    | 4   | 2  | 1   | 1  | 2  |
| 質問内容(重複あり)  | 資料所蔵調査    | 4  | 4   | 7  | 1   | 5  | 5  |
|             | 写真所蔵調査    | 2  | 2   |    |     | 1  | 1  |
|             | 事項調査      | 9  | 5   | 5  | 5   | 6  | 3  |
|             | その他       | 2  | 7   | 7  | 3   | 4  | 8  |

## 史料室の活動より (2023年4月～2023年9月)

(☆は複数回)

### 2023年4月

- ☆140年史編纂業務一年表・資料編データ作成、各部入稿前原稿校正、照会対応、資料・画像提供ほか
- ・校正—大学史資料協議会HPのうち当史料室のページ
- ・照会—大学入試広報課より、大学案内掲載予定の『赤毛のアン』村岡花子訳の引用について
- ☆来室／調査—元中高部理科教諭。野尻キャンプサイト購入前の事情について
- ・新任者へ展示コーナーにて沿革説明
- ・来室／調査—近藤秋子氏。富岡正男先生作曲の体操歌の楽譜、さらにはその英和独自の体操について
- ・17日—元カナダ合同教会牧師有賀誠一氏来校。桜プロジェクトの振り返りも含め面談
- ☆照会—高等部長より、TV番組「THE名門校 日本全国すごい学校名鑑」のため「音楽部」の発足年について
- ・来室／調査—大学平体教授。「東洋英和の歴史」授業、今後の大学での指針策定のため初期宣教師などの資料

### 2023年5月

- ・校正—山梨日日新聞社史(画像提供)のうち、東洋英和関連のページ
- ・出張—大学史資料協議会東日本支部総会・記念講演会出席於：明治大学(松本・三笠)
- ・照会—展示コーナー見学者より、ミス・ショーからの原書、給費生のことなど村岡花子についての質問多数
- ・照会—大学院図書室より、長野賞設置の経緯について→中高部「学校だより」1995年11月の記載を紹介
- ・故伊勢紀美子教授の寄贈図書を大学院図書室で調査
- ☆大学「東洋英和の歴史」「フレッシュマンセミナー自校史」授業のため準備
- ・来室—石原圭子氏(2020年3月大学院修了)。ストーン宣

教師、ハミルトン宣教師の叙勲関連資料(外務省外交史料館所蔵)に関する情報提供をしていただく

- ・来室／調査—安藤記念教員。幼稚園年史編纂のため、ミス・ドレークや長野静江先生について

☆来室—村岡美枝氏、恵理氏。次回の展示企画を協議

### 2023年6月

- ・照会—副院長より、内村鑑三は東洋英和女学校で教えていたか?→男子の東洋英和学校では教えていた
- ☆出張—大学「東洋英和の歴史」「フレッシュマンセミナー自校史」授業のため(松本・三笠)
- ・来室／調査—興望館堂村竜馬氏、中島豊氏(長野大学名誉教授)。ブラックモアについて、キャンプについて
- ☆来室／調査—水谷悟教授。『140年史』執筆のため
- ・来室／懇談—青木豊氏(渡邊里雨の曾孫)。寄贈資料をお持ちいただく。水谷悟教授を交え質疑応答
- ・取材—「史料室だより」特集のため村上哲朗教授に大学アスレチック広場の歴史についてインタビュー
- ・来室／調査—中学部教頭。合唱コンクール開始について
- ・17日—大学「東洋英和の歴史」授業見学指定日。受講生と担当教員2名、史料室スタッフで展示コーナー、史料室見学。各種貴重資料なども紹介
- ・来室／調査—早稲田大学応援部稲門会事務局長笹山俊彦氏。北原白秋による東洋英和校歌草稿を持参。当史料室所蔵の資料と比較検討
- ・来室／調査—ICU常務理事富岡徹郎氏。カックラン、牛込教会などについて
- ・23日—第1回 史料室委員会
- ・照会—幼稚園長より、卒業式の黄水仙の由来について→「史料室だより」No.24などを紹介
- ・30日—創立140周年記念行事等検討会(松本)

2023年7月

- ☆子ども140年史『東洋英和のれきし』校正
- ☆編集一「史料室だより」No.101
- ☆村岡花子文庫展示コーナー企画展準備
  - ・来室／調査一小学部教諭。軽井沢とヴォーリズについて
  - ・14日一第8回 140年史編纂委員会
  - ・出張一（15日）高崎の芝恭子名誉教授、吉岡元子元短期大学教授に当時の短大について伺う。（16日）旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージを同窓生有志と清掃奉仕
- ☆来室／調査一山本香織元小学部長。子ども140年史のための画像検索、史料調査
- ☆照会一後藤哲夫氏（元山梨英和学院教諭）より、カナダ・メソジスト『日本の百年』翻訳書刊行関連事項について
  - ・来室一展示コーナーに大坪覚氏。『東京のワクワクする大学博物館めぐり』刊行に伴い、諸々ご教示いただく
- ☆来室／調査一小学部地主武史教諭。140年史執筆、小学部の土地と建物の記録冊子作成のため
  - ・140年史打合せ一幼稚園パートについて、幼稚園にて幼稚園教諭と監修の水谷教授、史料室スタッフで協議
  - ・取材一国立科学博物館副館長栗原祐司氏と久世番子氏「博物館ななめ歩き」記事のため展示コーナーを取材

2023年8月

- ・見学一立教学院展示館。カートメルセンターでの歴史展示の参考のため（学院役職者と松本）
- ・空調工事のため、3日に展示ケース移動（展示コーナーは8月3日より9月3日まで休業）
- ・18日一六本木キャンパス体験のため、展示コーナーを案内
- ・来室一林陽子氏（1987年高等部卒）。2000年頃の野尻存続のための署名運動についてお話しいただく
- ・校正一大学同窓会誌「楓美」29号／大学学生手帳
- ・来室／調査一慶應義塾大学文学部 図書館・情報学専攻4年生。学校アーカイブズについての卒業論文のため

2023年9月

- ・資料貸出一福岡県飯塚市、伊藤右衛門邸「白蓮と花子が愛した大正ロマン展」のため、村岡花子文庫より書籍5冊
- ・12日一村岡花子文庫展示コーナー企画展設営
- ・資料貸出一新宿歴史博物館「生誕百二十年記念 林芙美子展」のため、林芙美子より村岡花子宛ての詩稿
- ・15日一子ども140年史入稿
- ・インタビュー一140年史のためハンドベルフェスティバル事務局の伊東千絵氏、新谷泰子氏、森重恵子氏
- ・22日一第9回 140年史編纂委員会
- ・26日一第2回 史料室委員会
- ・見学案内一水谷悟教授とゼミ生（静岡文化芸術大学）

【おもな移管資料】

- ・中高部聖書科研究室より、「1971年度 宗教委員会懇談会記録」（冊子）
- ・大学より、講演記録等カセットテープ類、段ボール2箱

【おもな受贈資料】

- ・1983年第6回中学部合唱コンクールプログラム、中2-4自由曲「夢ならば」楽譜。第5回卓球部合宿しおり
- ・元中高部理科教諭 橋詰正治先生より、山川國益氏揮毫の色紙（複数）ほか
- ・中高部生徒作成「英和解体新書」コピー（全ページ）

- ・父親有志の会より、第25回 東洋英和女学院ハンドベルフェスティバル記録DVD
- ・裁縫箱（セルロイド製）、長袖の夏服につけていた腕章、1965 SKISEMIワッペン、校章入り木製ケースほか
- ・青木豊氏より①渡邊里雨氏遺言（3葉）②青木（旧姓：渡邊）千鶴代氏画、額縁に入った色紙③千鶴代氏スケッチブック④千鶴代氏の書の短冊
- ・高等部夏期修養会（1968年）しおり／聖歌合唱交歓会式次第（1967年）／証会しおり【1966年】12月15日／キリスト教教育献金のすすめチラシほか
- ・芝恭子名誉教授のカナダ留学時の楓を押し花にした額／浜崎次郎御言葉絵巻書
- ・「東洋英和女学院【小学部 新校舍しおり】1954」／「東洋英和女学院 新館【小学部 献堂式】資料
- ・丸山（旧姓：井上）千代氏（1931年高女科卒）の優等者賞状、小学科、高等女学科、英語科卒業証書 8点
- ・ハンドベルフェスティバル事務局より、フェスティバルポスター（23回・24回）と今までの関連データ

（書籍・雑誌・論文）

- ・『2017年100周年記念 安藤記念教会の歩み～主より賜った恵みすべてをささげて～』2018年（第2版）
- ・村岡家より、エミリーシリーズ文庫本5冊／青蘭社刊行各校年史3冊／村岡花子関係写真・葉書ほか
- ・小池久子先生（元中高部英語科）遺品のうち、ミス・トーマスの会『Wilna Thomas: My Mind Travels to Japan』1985年
- ・神保タミ子氏（1958年短期大学英文科卒）より、自著『新装改訂版 脱会 今こそ知っておくべき統一協会の実像』キリスト教新聞社、2023年
- ・横山照子氏、根田春子氏（1956年高等部卒）より、『東洋英和女学院高等部 昭和31年卒業60周年記念文集 風』創英社、2016年
- ・関西学院学院史編纂室より、池田裕子『関西学院のエスプリを追って カナダ、アメリカ、ラトビアへ』関西学院大学出版会、2023年
- ・『興望館100周年記念誌 希望への扉』社会福祉法人興望館、2019年
- ・押川理佐氏（1989年高等部卒、1993年大学卒）より、自著『もしものときのがんこちゃん』NHK出版、2023年ほか
- ・大坪覚氏より、自著『東京のワクワクする大学博物館めぐり』トゥーヴァージンズ、2023年（制作協力）
- ・山梨文化会館編『山梨を拓く 新聞人が挑んだ150年 下巻』2023年（制作協力）
- ・東京YMCA『野尻学荘80回記念誌～山々高く～』2016年
- ・諸見里裕子氏（1971年高等部卒）より、自著『諸見里裕子小説集』新潮社、2023年（非売品）
- ・平体由美教授より、自著『病が分断するアメリカー公衆衛生と「自由」のジレンマ』筑摩書房、2023年
- ・持田叙子氏（1977年高等部卒）より、自著『おとめ座の荷風』慶應義塾大学出版会、2023年ほか

【おもな画像提供】

- ・中高部へTV番組「THE名門校 日本全国すごい学校名鑑」のため、ミス・カートメルの画像ほか7点
- ・山本香織前小学部長へ、子ども140年史のため約270点

🌸 展示コーナーご案内

◆村岡花子文庫展示コーナー企画展

一学院創立140周年記念展示一東洋英和の年史・学院関係刊行物からたどる村岡花子が描き出した東洋英和の歴史  
 今回の展示では村岡花子が手掛けた東洋英和関連の刊行物を紹介し、“歴史を残す”ということにおいて村岡花子が果たした業績をたどっていきます。

会期：2024年11月30日（土）まで

◆学院資料展示コーナー企画展「東洋英和の周年記念一創立25周年から現在まで一」

会期：2024年12月21日（土）まで

🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40  
 Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp

🌸 2023年度

史料室委員会委員

|          |                 |
|----------|-----------------|
| 委員 長     | 平体 由美（大学）       |
| 大 学      | 野田 潤<br>町田 小織   |
| 中 高 部    | 神藤 真理<br>町島 由美子 |
| 小 学 部    | 地主 武史           |
| 幼 稚 園    | 宮坂 里奈           |
| かえで幼稚園   | 大漣 知子           |
| 法人事務局史料室 | 松本 郁子<br>三笠 知世  |

No.91 (2018.11.6)

特集：村岡花子 没後50年記念特集(2)

村岡花子と竹柏会「心の花」 佐佐木 幸綱  
 「史料室だより」リニューアルご挨拶 山本 香織  
 〈資料紹介〉33 「雑記帖その三」(前編)  
 一村岡花子 高等科卒業からの十ヶ月一 神藤 真理  
 学院資料・村岡花子文庫展示コーナーご案内  
 〈東洋英和の先生がた〉1 塚本 哲也先生  
 一忍耐をもって取り組みれば、次第に道が開ける一  
 [三笠 知世]

史料室から、ごきげんよう  
 利用統計／史料室の活動より  
 「史料室だより」既刊号目次 No.81～90

No.92 (2019.5.10)

特集：村岡花子 没後50年記念特集(3)

記録短歌への道 一歌人 村岡花子を考える一 三枝 昂之  
 〈資料紹介〉34 「雑記帖その三」(後編)  
 一村岡花子二十歳、芸術への思い、翻訳者への道一 神藤 真理  
 村岡花子の学院への寄付と著作権の延長  
 村岡花子記念講座のご案内  
 〈東洋英和の先生がた〉2 小野寺 昭夫先生  
 校庭のイチヨウの木のように [三笠 知世]

学院資料展示コーナーご案内  
 史料室から、ごきげんよう  
 利用統計／史料室の活動より

No.93 (2019.11.6)

特集1：カナダ婦人宣教師の教育支援 第2次世界大戦時の  
 強制収容された日系カナダ人生徒への支援 溝上 智恵子  
 報告 四つの教会<桜プロジェクト>

植樹5周年記念ツアーに参加して 山本 香織  
 〈資料紹介〉35 プロムさん寄贈  
 ミス・カートメルのWMSのバッジ

特集2：大学開学30周年に寄せて 池田 明史  
 〈東洋英和の先生がた〉3 池田 守男先生  
 与うるは受くるより幸いなり  
 一サーバント・リーダーシップに生きる一 [松本 郁子]

利用統計／史料室の活動より  
 村岡花子文庫展示コーナーご案内

No.94 (2020.5.10)

特集1：1964年 東京オリンピックの時代と東洋英和女学院  
 松本 郁子

〈資料紹介〉36 学院創立80周年 関連資料  
 特集2：オリンピックを支えた東洋英和の人びと  
 〈東洋英和の先生がた〉4 芝原 翠先生  
 短期大学図書館と史料室のパイオニア [三笠 知世]

学院資料展示コーナー・村岡花子文庫展示コーナーご案内  
 史料室からごきげんよう  
 利用統計／史料室の活動より

No.95 (2020.11.6)

特集：野尻キャンプサイト50周年 一野尻教育の意義一  
 石澤 友康

年表にみる 野尻キャンプサイトと東洋英和  
 〈資料紹介〉37 「野尻」を知るための基本資料と行事解説  
 一ただの夏期行事にとどまらない、歴史の蓄積と現代に  
 続く実践一

〈東洋英和の先生がた〉5 野尻を支えた先生がた 三笠 知世  
 利用統計／史料室の活動より

No.96 (2021.5.10)

特集：日米で活動したライブラリアン福田なをみ 小出 いずみ

特集：鍵はアクセス 一情報資源の構築に携わって一

小出 いずみ  
 〈資料紹介〉38 『村岡花子文庫 洋書目録』から垣間見る  
 村岡花子の横顔 梶原 由佳  
 史料室から、ごきげんよう  
 〈東洋英和の先生がた〉6 ダフニ・ロジャース先生  
 一日本の人びとのよき友、よき聞き手として生きる一  
 松本 郁子  
 利用統計／史料室の活動より

No.97 (2021.11.6)

特集：東洋英和の音楽教育①

中学部・高等部の音楽教育一伝統に連なる一 津屋 式子  
 〈資料紹介〉39 中高部の音楽関連資料  
 一富岡正男先生の遺された楽譜など130点一

特集：東洋英和の音楽教育②

東洋英和幼稚園の音楽教育  
 一リズム活動と創造活動としての音楽について一  
 菅原 陽子/堤 加壽美  
 〈東洋英和の先生がた〉7 今村 寿々代先生  
 文芸会の立役者 一「清らかな大きな童女」一 松本 郁子  
 利用統計／史料室の活動より

No.98 (2022.5.10)

特集：東洋英和の音楽教育③

小学部の音楽教育 一歌を通して 心をはぐくむ一  
 加藤 牧菜  
 21世紀の小学部音楽授業 山内 桜子

特集：東洋英和の音楽教育④

短期大学保育科一かえで幼稚園一大学保育子ども学科  
 一歌うこと・賛美すること・共に響き合うこと一  
 大漣 知子/小井塚 ななえ  
 〈資料紹介〉40 中高部「道(ことば)」45年の変遷  
 神藤 真理

〈東洋英和の先生がた〉8 柄内 禮子先生  
 自己研鑽に裏づけられた子どもを活かす教育実践  
 三笠 知世  
 利用統計／史料室の活動より

No.99 (2022.11.6)

特集1：親族に語り継がれる柳原白蓮

一武田 資子氏インタビュー一  
 〈資料紹介〉41 柳原白蓮ゆかりの染め帯  
 特集2：「村岡花子記念講座」を振り返る  
 一多彩な側面を見せた講座の足跡一 史料室

「村岡花子記念講座」講座一覧(2016～2021年度)  
 村岡花子文庫展示コーナーご案内/おしらせ  
 〈東洋英和の先生がた〉9 G.E. キュックリヒ先生  
 支えられた保育者 一東洋英和へのメッセージ一  
 菅原 陽子  
 利用統計／史料室の活動より

No.100 (2023.5.10)

特集：長野 彌先生

一東洋英和の自立と婦人ミッションへの感謝一  
 松本 郁子  
 〈資料紹介〉42 長野 彌院長によるカナダ訪問時のスピー  
 チ原稿(1965年)  
 長野 彌先生の思い出 一同窓生からのご寄稿一  
 〈東洋英和の先生がた〉10 岡本 幸江先生  
 よき時代にしあわせに育った者として英和の生命を伝える  
 町島 由美子

140年史の編纂がスタートしています  
 東洋英和女学院にとっての年史編纂事業 水谷 悟  
 展示案内  
 利用統計／史料室の活動より